

## 研 究

小児がん啓発人形劇が小学校教員に  
復学支援を想像させる効果永井 祐也<sup>1)</sup>, 岡本 光代<sup>2)</sup>, 永井絵莉子<sup>3)</sup>  
田中賀陽子<sup>4)</sup>, 小田 真弓<sup>5)</sup>, 武田 鉄郎<sup>6)</sup>

## 〔論文要旨〕

多くの小児がん罹患した児童生徒が闘病生活を経て地元校に復学しており、復学支援の必要性を地元校の教員に理解してもらう方法を検討する必要がある。とりわけ、小児がん啓発人形劇は、小学校教員が児童と一緒に鑑賞することで、復学支援をより具体的に想像できるようになるものと考えられる。そこで、本研究では、小児がん啓発人形劇を鑑賞することが、小学校教員に復学支援をより多く想像させるのか検討し、小児がん啓発人形劇による啓発の効果と課題について考察することを目的とした。本研究の対象者は、児童を対象とした小児がん啓発人形劇を鑑賞した4つの小学校の教員51人であった。これらの小学校には、小児がん罹患した児童は在籍していなかった。「小児がん罹患した児童を担任教諭として受け持つ場合、どのような配慮・支援を行おうと考えるか」という設問に自由記述で回答を求め、児童と一緒に人形劇を鑑賞した教員と鑑賞しなかった教員が想像する支援内容の傾向を分析した。その結果、人形劇を鑑賞した教員の記述した復学支援の総数が多く、なかでも、地元校とのつながりの維持やクラスメートへの説明といった復学する前に行う支援内容を記述した割合が高かった。このことから、小児がん啓発人形劇を鑑賞した小学校教員は、小児がん罹患した児童生徒の復学支援をより一層具体的に想像し、復学の際に共通して必要となる支援内容を想像しやすくなる可能性が示唆された。

Key words : 小児がん, 復学支援, 小学校教員, 人形劇

## I. 目 的

小児がんの治癒率向上により、多くの小児がん罹患した児童生徒は闘病生活を経て地元校に復学している。しかし、治療が終了しても、復学の問題、晩期障害、就職、結婚と、社会に戻るにあたっての問題は多い<sup>1)</sup>。そのなかで、多くの先行研究は、退院後すぐに直面する地元校への復学における問題を取り上げ、その問題の解決方法を検討している<sup>2,3)</sup>。地元校への復学を円滑に進めるために多職種協働は重

要であり、地元校の担任教員の参画も必要不可欠である。そのため、地元校の担任教員に焦点を当て、小児がん罹患した児童生徒に対する復学支援の内容が整理されてきた<sup>4)</sup>。それによると、小児がん罹患した児童生徒の円滑な復学に共通して必要となる支援として、地元校とのつながりを維持すること、クラスメートへ病気の説明を行うこと、退院直前の調整会議へ参加すること、保護者と復学後の配慮事項について話し合う機会を設けることの4点が提案されている。これらを地元校の教員が理解し、復学

Effect of the Puppet Play among Elementary School Teachers to Educate Demanded Supports

[3278]

when Children with Cancer Return to School

受付 20. 9.16

Yuuya NAGAI, Mitsuyo OKAMOTO, Eriko NAGAI,

採用 21. 8.24

Kayoko TANAKA, Mayumi ODA, Tetsuro TAKEDA

1) 大阪大学大学院人間科学研究科(研究職)

2) 和歌山県立医科大学保健看護学部(研究職)

3) 筑波大学大学院人間総合科学研究科(大学院生)

4) やしま学園高等専修学校(心理職)

5) 和歌山信愛大学教育学部(研究職)

6) 和歌山大学教育学部(研究職)

に向けて支援することで、小児がんに罹患した児童生徒の円滑な復学が期待できるだろう。しかし、地元校の担任教員の多くは、小児がんに罹患した児童生徒に接した経験が乏しく、自身の経験則に頼って支援を行うことが難しい。そのため、復学支援の必要性を地元校の教員に理解してもらう方法を検討する必要がある。

近年、小児がんの子どもの復学支援について考えさせる教材作成の試みが報告されている<sup>5,6)</sup>。そのうち、小児がん啓発人形劇は、筆者らが所属する啓発活動を目的とする任意団体によって、児童生徒や教職員を対象に上演されている<sup>5)</sup>。人形劇は、人形を生きているように動かす演技によって、無生物にも自分と同じような生命を感じるアニミズムが働き、登場する人形が抱く困難さや心情を享受しやすい<sup>7)</sup>。この人形劇を教員志望の大学生が鑑賞したことで、復学支援を具体的に想像できるようになり、地元校とのつながりの維持や、クラスメートへの説明といった円滑な復学に共通して必要となる支援を想像しやすくなったことが報告されている<sup>8)</sup>。そのため、小児がんに罹患した児童生徒に接した経験が乏しい小学校の教員も、児童とともに人形劇を鑑賞することで、小児がんに罹患した児童に対する支援をより具体的に想像できるようになるものと考えられる。

そこで本研究では、小児がん啓発人形劇の鑑賞が小学校教員の円滑な復学に関する支援内容をより多く想像させるのか検討し、小児がん啓発人形劇による啓発の効果と課題について考察することを目的とした。なお、先行研究<sup>9)</sup>では、復学における理想的な支援内容をあらかじめ質問紙に列挙し、支援しようと思うかを尋ねた結果、小中学校の教員がほとんどの項目で小児がんに罹患した児童生徒を支援しようと考えていたことが報告されている。しかし、この方法から得られた結果は、調査者によってあらかじめ設定された項目に対して考えることができ、実際に小児がんに罹患した児童を受け持った際に、それらの項目を考えながら復学支援を行うことができるかは不透明である。そのため、本研究では、小学校教員に、小児がんに罹患した児童生徒を受け持ったことを想定して、行おうと考える支援内容を自由記述で回答するように求め、内容分析<sup>10)</sup>により記述の有無を記録して量的に分析する方法を採用した。

表1 群間の研究対象者基本情報

	鑑賞群 (n=35)	未鑑賞群 (n=16)
勤務年数	15.00 (4.00-30.00)	16.50 (4.25-32.75)
性別 (女性:男性)	19:16	11:5
特別支援教育関連研修の参加 (あり:なし)	32:3	13:3
小児がん罹患児童に関わった経験 (あり:なし)	8:27	2:14

勤務年数は中央値(四分位範囲)を示す。それ以外は、人数比を示す。

## II. 対象と方法

### 1. 研究対象者・調査手続き

20XX年から3年間にわたり、筆者らが所属する障害児・病弱児理解啓発チーム「オレンジキッズ」は、A県における公立小学校4校で児童を対象とした小児がん啓発人形劇(「だいじょうぶ、マイちゃん」、くすのき燕著)を上演してきた<sup>5)</sup>。本研究の対象者は、この4校に勤務する教員113人であった。これらの小学校には、小児がんに罹患した児童は在籍していなかった。研究対象者には人形劇上演後に各学校の校長を通じて、所属する教員全員に質問紙を配布した。質問紙は配布1週間後に筆者らの学校訪問によって回収された(回収率66.4%)。そのうち、質問項目すべてに回答のあった51人(有効回答率45.1%)を本研究の分析対象とした。このサンプルサイズは、G\*Power 3<sup>11)</sup>の事前分析で、2群のサンプルサイズの比1.00、検定力0.80、 $d=0.80$ の効果の大きさを検出できるように推定された結果( $n=52$ )にほぼ一致していた。なお、効果量の大きさは、人形劇の鑑賞が、教員の復学支援を考える際の重大な要因になると予測して設定した。また、2群のサンプルサイズの比は、研究対象者の鑑賞が学校の都合で決められたため、事前分析では2群に同じ人数が振り分けられると仮定した。小学校の全学年の児童を対象に人形劇を上演しなかったため、教員51人は人形劇を鑑賞した者(鑑賞群:35人)と鑑賞しなかった者(未鑑賞群:16人)に分かれた。鑑賞群と未鑑賞群では、勤務年数、男女比、これまでの特別支援教育関連研修の参加、小児がんに罹患した児童に関わった経験に差はなかった(表1)。

### 2. 質問項目

基本属性として、勤務年数、性別、特別支援教育関

表2 地元校の教員に求められる復学支援に関するコーディングカテゴリー

カテゴリー	定義 「研究対象者の記述例」
地元校とのつながりの維持	地元校の教員やクラスメートとのつながりを維持する支援 「友だちからのメッセージなどを渡し、励ます」 「入院中は様子をみに、お見舞いに行く」
クラスメートへの働きかけ	病気の説明や感染症予防の対策など、復学前に行われるクラスメートへの働きかけ 「クラス全体に小児がんについて授業を行う」 「退院後、学校生活を楽しく送れるようにクラスの児童に協力してもらう」
クラスへの適応を促す支援	友人関係の見守り等、復学後に行われるクラスメートへの働きかけ 「退院後はできることはなるべくやらせるようにする」 「退院後は、日々観察で注意して確認する」
学習保障	入院中にクラスの授業を知らせたり、復学後に個別にしたりといった学習に関する支援 「授業の進捗を伝える」 「勉強の遅れを少しずつ取り戻せるように個人の勉強を見る」
治療の副作用・後遺症への配慮	治療の副作用・後遺症に応じた配慮や、必要に応じて設備を整える支援 「頭髪で心配があれば配慮する」 「退院直後は、小児がんの子どもが学校に通える環境をつくる」
体力の回復に応じた配慮	体力の低下に伴う学校生活の調整や感染症発生時の対応 「すぐに体力が戻らないので、体調が悪いなら休ませる」 「運動の制限など細かく確認し、注意して見る」
多職種との連携	復学前の調整会議への参加や主治医など専門職との情報共有 「その子の主治医、保護者の方とどうしたら良いかを話し合う」 「医療機関と関われるなら、支援の仕方を学ぶ」
保護者との連携	入院時の病状確認や復学時の連絡・調整、復学後の緊急時連絡体制の構築 「親にどのような配慮・支援をしてほしいか聞く」 「児童の症状の把握」
校内連携	校内の教職員間の情報共有、養護教諭やスクールカウンセラーとの調整 「緊急体制に備えて学校教職員全体に周知する」 「養護教諭と連携した授業を行う」
転籍における配慮*	転籍の説明や手続き
本人・保護者への情緒的サポート	本人や保護者の復学にあたって不安なことを把握し、情緒的なサポートを行う 「クラスや学校で何をしているかを話し、児童の不安を減らす」 「退院後、クラスに入りやすそうな雰囲気迎える」
情報の取り扱い	プライバシーの保護に努める配慮 「患児の了解を得たうえで、(説明する)」 「学級の児童らにどのように説明するか、関係者と話し合う」
疾患の理解	本人が罹患した疾患について調べ、保護者等と話題を共有できるようにする配慮 「自分も小児がんについて理解する」

\*該当する記述が得られなかったため、記述例を記載していない。

連の研修会の参加経験、小児がん罹患した児童に関わった経験、小児がん啓発人形劇の鑑賞の有無をたずねた。また、「小児がん罹患した児童を担任教諭として受け持つ場合、小児がん罹患した児童の入院中、退院直前、退院後の学校生活において、どのような配慮・支援を行おうと考えますか?」という設問に自由記述で回答を求めた。回答は箇条書きでも構わない旨を伝えた。

### 3. 人形劇のあらすじ

白血病を患った小学生のマイは、長期間入院し化学

療法等の辛い治療を行った。その間、地元校の友だちのお見舞いや手紙が励みとなった。退院して地元校に戻ることもあったが、マイは、勉強の遅れやマスクやカツラの装着を友だちからかわれないか不安を抱いていた。マイの友だちがマイの不安な気持ちを理解し優しく接したおかげで、マイは安心して学校に戻ることができた。

### 4. 分析

自由記述のデータは、内容分析<sup>10)</sup>の手法により、回答が得られた自由記述を文脈単位、1内容を1項目の

表3 各カテゴリーの記述の有無と人形劇鑑賞との関係

カテゴリー	記述	鑑賞群 (n=35)	未鑑賞群 (n=16)	<i>p</i> *
地元校とのつながりの維持	あり	27	6	< .01
	なし	8	10	
クラスメートへの働きかけ	あり	22	5	< .05
	なし	13	11	
クラスへの適応を促す支援	あり	2	6	< .01
	なし	33	10	
学習保障	あり	4	2	<i>n.s.</i>
	なし	31	14	
治療の副作用・後遺症への配慮	あり	1	0	<i>n.s.</i>
	なし	34	16	
体力の回復に応じた配慮	あり	10	4	<i>n.s.</i>
	なし	25	12	
多職種との連携	あり	6	2	<i>n.s.</i>
	なし	29	14	
保護者との連携	あり	14	2	<i>n.s.</i>
	なし	21	14	
校内連携	あり	5	0	<i>n.s.</i>
	なし	30	16	
本人・保護者への情緒的サポート	あり	17	8	<i>n.s.</i>
	なし	18	8	
情報の取り扱い	あり	4	1	<i>n.s.</i>
	なし	31	15	
疾患の理解	あり	1	0	<i>n.s.</i>
	なし	34	16	

※ $\chi^2$ 検定, または, Fisher の直接確率検定の結果を示す。  
数字は人数を示す。

記録単位として区切った。それらを先行研究<sup>4)</sup>を参考に作成したカテゴリー（表2）にしたがってコーディングし、対象者ごとに各カテゴリーにおける記述の有無を記録した。また、記述があったカテゴリーの総数を復学支援の内容の記述数として算出した。コーディングの信頼性を検討するため、独立した評価者1人がこの研究で用いたカテゴリーをコーディングするために訓練された。データの25%がコーディングされ、評価者間一致率は十分高い値であることが確認された ( $\kappa = 0.77$ )。

統計処理は IBM SPSS version 22 for Windows (SPSS, Inc., Chicago, IL, USA) を用いた。鑑賞群と未鑑賞群の自由記述から得られた復学支援内容の記述数を比較するために、Mann-Whitney の U 検定を行った。各カテゴリーの記述の有無と鑑賞の有無とのクロス集計の偏りを検討するため、 $\chi^2$  検定を行った。クロス集計の4つのセルのうち、度数が5未満のセルが1つ以上存在する場合には、Fisher の直接確率検定を行った。

## 5. 倫理的配慮

本研究は、大阪大学大学院人間科学研究科行動系研究倫理委員会の承認を受けて実施された（承認番号23104）。小学校から人形劇上演団体へ本研究の該当人形劇「だいじょうぶ、マイちゃん」の上演依頼があった際に、筆者らが事前に学校へ訪問し、打ち合わせを行った。その際、質問紙を提示しながら研究の趣旨、配布・回収方法を文書と口頭で説明し、校長と担当教員の同意を得た。質問紙を配布された教員の回答は自由意思を尊重する旨、理由に関係なくいつでも中止できる旨、得られた記録等の個人情報を厳重に管理する旨、研究発表の際に個人・学校を特定する情報は公表しない旨を、配布した質問紙に明記した。回収時は封筒に入れるように促し、回答していない場合にも周囲にわからないように配慮し、質問紙の回答と提出をもって同意したとみなした。

## III. 結 果

まず、鑑賞群と未鑑賞群の自由記述から得られた復

学支援内容の記述数を比較した。Mann-Whitney の U 検定の結果、鑑賞群の記述した復学支援の総数 ( $4.23 \pm 2.06$ ) は、未鑑賞群 ( $2.88 \pm 1.46$ ) よりも有意に高かった ( $Z = 2.11, p < .05, r = 0.30$ )。

次に、各カテゴリーの記述の有無と鑑賞の有無とのクロス集計について、 $\chi^2$  検定、または、Fisher の直接確率検定を行った (表 3)。その結果、地元校とのつながりの維持 ( $\chi^2 (1) = 7.56, p < .01, \phi = 0.39$ )、クラスメートへの働きかけ ( $\chi^2 (1) = 4.40, p < .05, \phi = 0.29$ ) に関する記述があった割合は、鑑賞群の方が未鑑賞群よりも有意に高かった。一方、クラスへの適応を促す支援に関する記述があった割合は、未鑑賞群の方が鑑賞群よりも有意に高かった (Fisher's exact test,  $p < .01$ )。学習保障、副作用への配慮、体力に応じた配慮、多職種連携、保護者との連携、校内連携、情緒的サポート、情報の取り扱い、疾患の理解に関する記述があった人数の割合に鑑賞の有無による偏りはみられなかった。

#### IV. 考 察

本研究の目的は、小児がん啓発人形劇の鑑賞が小学校教員に円滑な復学に関する支援内容をより多く想像させるのか検討し、小児がん啓発人形劇による啓発の効果と課題について考察することであった。

人形劇を鑑賞した教員は、鑑賞しなかった教員よりも、記述した復学支援内容の総数が有意に多かった。このことから、小児がん啓発人形劇には、小児がんに罹患した児童の復学に向けた支援を、小学校教員により一層想像させる効果が示された。とりわけ、人形劇を鑑賞した小学校教員の、地元校とのつながりの維持やクラスメートへの働きかけの想像に効果が示された。これは、先行研究で指摘されている復学に共通して必要となる 4 つの支援<sup>4)</sup>に含まれる内容であり、小学校の教員が復学支援に特に必要とされる支援内容を想像することに効果的であったと考えられる。これらが想像されやすくなった要因としては、人形劇の中でクラスメートからの手紙やお見舞いといったつながりの維持に焦点を当てた場面があることや、人形劇を鑑賞し小児がんについて真剣に考えていた児童の姿を観察したことで、教員が病気の説明等のクラスメートへの働きかけの必要性を感じたことが考えられる。これらの結果は、教職志望の大学生を対象に検討した先行研究の結果と一致しており<sup>7)</sup>、現職の小学校教員にも

その知見を拡張させることができたと考える。

人形劇を鑑賞した教員は、地元校とのつながりの維持やクラスメートへの働きかけといった、入院中から復学直前にかけて行われる支援内容を記述した割合が高かった。一方、人形劇を鑑賞しなかった教員は、クラスへの適応を促す支援を記述した割合が、鑑賞した教員よりも有意に高かった。ここでいうクラスへの適応を促す支援とは、復学後の友人関係の見守りや本人を特別扱いしない等の復学後のクラスへの適応に課題がないか見守る支援である。人形劇を鑑賞した教員は、真剣に鑑賞する児童の様子から、小児がんに罹患した児童生徒が復学する前にクラスメートに病気の説明をすることによるポジティブな効果に対する期待が高まった可能性が考えられる。このことから、人形劇を鑑賞した教員の考える復学支援は、問題が起こってからの対応よりも、問題が起こる前に予防策を講じることを想像しやすくなることが示唆された。

また、多職種連携や保護者との連携等を記述した割合は、人形劇鑑賞の有無によって、有意な傾向の違いはなかった。これは、人形劇の中で描かれていない要素であり、人形劇を鑑賞するだけで復学支援を網羅的に想像することに限界があるといえる。そのため、人形劇の鑑賞に加えて、例えば、地元校への復学支援に必要な教育情報を提供する病弱教育支援冊子<sup>12)</sup>を配布し、補足して説明する必要があると考えられる。

#### V. 結 論

本研究は、小児がん啓発人形劇を児童と一緒に鑑賞した小学校教員が、小児がんに罹患した児童生徒の復学支援をより一層具体的に想像し、復学の際に共通して必要となる支援内容を想像しやすくなる可能性が示唆された。小児がんに罹患した児童生徒の円滑な復学支援に向けて、教員やクラスメートといった周囲の理解を促す啓発方法の開発は小児保健学的意義を有するものであり、本研究も少なからずエビデンスの蓄積に貢献する研究知見であると考えられる。

しかし、本研究は、小児がんに罹患した児童が在籍していない小学校で上演しており、実際の復学支援において人形劇をどのように運用するのかについては、今後の実践研究の蓄積が必要である。また、鑑賞群と未鑑賞群では勤務年数等の基本情報に有意な差はなかったものの、人形劇鑑賞前のデータを収集・分析することができていないことを踏まえて、人形劇による

効果を慎重に解釈する必要がある。

## 謝 辞

本研究実施に際し、研究にご参加いただいた小学校教員の皆様に感謝申し上げます。また、本研究実施のために、人形劇の練習や上演活動等とともにした障害児・病弱児理解啓発チーム「オレンジキッズ」の皆様、脚本・演出等ご指導いただきました、くすのき燕様に御礼申し上げます。

本研究は、日本育療学会第20回学術集会において口頭発表を行いました。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 細谷亮太, 石本浩市, 梶山祥子, 他. 小児がん経験者のためのガイドライン—よりよい生活を目指して—. 第1版. 東京: 財団法人がんの子どもを守る会, 2006.
- 2) 平賀健太郎. 小児がん患児の前籍校への復学に関する現状と課題. 小児保健研究 2007; 66: 456-464.
- 3) 平賀紀子, 古谷佳由理. 小児がん患児の復学支援に関する文献検討. 日本小児看護学会誌 2011; 20: 72-78.
- 4) 永井祐也, 川内絵莉子, 岡本光代. 小児がんに罹患した児童生徒の復学における地元校の担任教師が行った復学支援—文献調査を通して—. 育療 2016; 59: 34-43.
- 5) 岡本光代, 永井祐也, 田中賀陽子, 他. 小児がん経験者に対する一般児童の知識と態度の変容—人形劇による小学校での啓発活動から—. 日本育療学会第16回学術集会論文集, 2012; 25.
- 6) 大見サキエ, 安田和夫, 森口清美, 他. 小児がん患児の復学支援ツールの開発—小学生に対する試作絵本の読み聞かせ効果と活用法の検討—. 岐阜聖徳学園大学看護学研究誌 2016; 1: 3-15.
- 7) 三宅茂夫, 浅野泰昌. 幼児教育における人形劇の教育的価値に関する先行研究の問題点—倉橋惣三, 川尻泰司, 内山憲尚, 清水浩二を中心にして—. 教育諸学研究 2007; 21: 19-30.
- 8) 永井祐也, 岡本光代, 永井絵莉子, 他. 小児がん啓発人形劇が教員養成課程所属学生の想起する復学支援に及ぼす効果. 育療 2020; 67: 31-40.
- 9) 副島堯史, 村山志保, 東樹京子, 他. 小中学校の教員における小児がんへの認識および小児がん経験者への支援. 小児保健研究 2014; 73: 697-705.
- 10) 有馬明恵. 内容分析の方法. 京都: ナカニシヤ出版, 2007.
- 11) Faul F, Erdfelder E, Lang AG, et al. G\*Power3: a flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. Behavior Research Methods 2007; 39: 175-191.
- 12) 滝川国芳, 西牧謙吾. 病気のある子どもを担当する教師間における情報共有手段の開発に関する研究—ICT (Information and Communication Technology) 活用による病弱教育支援冊子の作成を通して—. 川崎医療福祉学会誌 2010; 20: 147-157.

## 〔Summary〕

Because many of children with cancer return to school, elementary school teachers have to understand necessity of supports for returning children. The authors hypothesized that such teachers easily imagine more detailed supports when they see the puppet-play starring such a child. Thus we intended to validate effect of the play to encourage teachers to imagine demanded supports. Fifty-one teachers from 4 schools participated in our study. None of schools had children with cancer. We questioned them what supports they would provide if children with cancer returned to school from hospital. Contents of open-ended answers were analyzed through the method by Berelson. As a result, teachers who viewed the play imagined more number of supports. Of them, they frequently imagined supports before the come-back such as sustained connection with school and explanation to their peer children. Our results suggest that the puppet-play educate teachers well when the children with cancer return to school.

## 〔Key words〕

childhood cancer, supporting school re-entry, elementary school teacher, puppet play